

論文概要書

「井伏鱒二作品における言語的モチーフの研究——翻訳・ナンセンス・日本語——」

塩野 加織

作家井伏鱒二（一八九八～一九九三）の文筆活動は、小説「幽閉」（『世紀』一九二三年七月）を始点、『黒い雨』（新潮社、一九六六年一〇月）を終点とし、そこに至る成熟の過程を軸に記述されることが多い。作家のこうした文学的道程は、現在に至る井伏鱒二研究を牽引し、その発展に大きく貢献してきたことは疑いがない。しかし、それが半ば自明視され定説化することで、検証が立ち遅れてきた事象がある。その一つが、井伏作品に頻出する言語的モチーフのありようとその機能である。本論文はこれを、井伏文学のなかに新たに位置づけることを目的としている。そのために、作家のデビュー前後に遡って探査することから出発し、以下に挙げる井伏鱒二の小説・評論・エッセイ・翻訳を同時代言説とともに読み解くことを通して、井伏作品の言語的モチーフの特徴と機能、その持続性や変容を析出した。そして、これらの分析に基づきながら、井伏文学における言語的モチーフの働きを示し、そこに論理的展開を見出した。

序章 本研究の目的と方法

この章では、本研究の背景となる問題意識および先行研究の課題点を示し、論の目的と方法について述べた。

井伏作品には、音や語の微細な差異から物語が起ち上がったたり、あるいはまた、話の本筋とは全く関係がないにも関わらず、言葉に関する細かな解釈や自己言及的な説明が頻繁に描き込まれる。これ以外にも、外国語や方言やジャーゴンといった異言語・言語変種、さらには言い直しや書き直しや聞き書き等の言表行為・書記行為、または言い間違えや誤訳によるディスコミュニケーション等々のような多種多様な言語的モチーフが、習作から晩年の作品に至るまで

数多く描かれてきた。しかしこうした特徴については、先行研究で早くから注目されてきたものの、いまだ十分に議論されたとは言いがたい。なかでも、考察対象となる作品が限定的であり、体系的な視点からの検証が少ない点に課題がある。これを踏まえて本論文では、作中に頻繁に登場する言語的モチーフが、井伏文学の生成と展開に、どの程度どのように関わるのかを明らかにすることを目的とした。そのためにとくに留意するのは次の二点である。

まず第一に、初期作品を抜本的に読み直す。作品中の言語的モチーフとその特徴が、井伏文学の主要な要素たり得るかどうかは、取り上げる時期や作品ジャンルとも密接に関わるはずである。そのためにも、個々の作品分析と併せて、複数の作品を比較参照し、その連関と隔たりを見極めることが必須となる。本論では、井伏のデビュー前後の文学活動を新たに探査し、これまで注目されることの少なかった著作や人脈等を掘り起こす。従来、習作期の作品として概括的に扱われてきた著作群のなかには、その後の創作活動につながる表現方法やそれを捉え返す視点をいくつか見出すことができる。これらを参照することで、従来の研究史とは異なる井伏文学の基点を提示する。また、第二として、井伏作品の同時代的位置づけをその受容のありようととも精査する。これまで述べてきたように、

井伏作品に頻出する言語的モチーフは、作家の文学的個性として早くから注目されてきた一方で、それ自体の同時代的意義や歴史的な位置については具体的な考察が乏しい。本論では、テキストの自律的側面にも注目することで、作品の言葉がもたらした効果や読者による受容のありようを探る。これにより、作家主体の枠組みだけでは記述不可能だった井伏文学の特徴や可能性を捉えることを目指す。

以上二点を踏まえた上で、本論は全八章を設ける。各章は個別の作品論から成り、これ以外に序章と終章を置いた。章ごとの個別の方法および問題設定については、以下の通りである。

第一章 翻訳小説『父の罪』

——翻訳からの出発、あるいは翻訳への出発——

この章では、井伏鱒二の初期の文学活動のうち、翻訳小説の出版を取り上げた。作家として世に出る前の井伏は、ドイツの劇作家ズーダーマン (Hermann Sudermann) の長篇小説『猫橋』(Der Katzensteg, 1889) を翻訳し、一九二四年に聚芳閣から単行本『父の罪』を刊行している。これは、井伏にとって最初の単行本である。この翻訳小説『父の罪』は、従来の研究史で年譜的事実としては把握されていたものの、未詳な点が多く、これまでほとんど議論されてこなかった。しかし、井伏文学の基点を問い直すためには、この訳業の精査が必須となる。そこで本章では、『父の罪』が翻訳されるまでの経緯や底本の確定を含め、この翻訳活動を探索した。ズーダーマンの小説『猫橋』は、小説描写の方法をめぐり夏目漱石と田山花袋の間に論争を生んだことでも有名で、明治期以降複数の翻訳が試みられている。注目すべきは、翻訳者たちが自らの作品解釈や翻訳観を訳書に綴っていたことで、井伏が記した『父の罪』序文にもそうした叙述を確認できる。そこで、『父の罪』本文を底本および他邦訳と比較し、井伏訳の特徴を提示するだけでなく、翻訳者による序文や作品解説文を読み解き、そこに胚胎する翻訳観を抽出した。この分析に基づいて、井伏の翻訳観と訳述方法を明らかにし、当時

の訳業が後の創作活動と強く結びついていたことを明らかにした。

第二章 「鯉」・「たま虫をみる」・「谷間」

——初期作品における改稿——

この章では、初期作品における改稿の特質を、『三田文学』という場に注目しながら考察した。中心的に取り上げたのは、「鯉」(『桂月』一九二六年九月)と「たま虫をみる」(『文学界』一九二六年一月)の二作である。無名時代の井伏は、旧作の改稿を頻繁に行なっており、文壇に足掛かりを得る契機となった『三田文学』掲載作もこれに該当する。とりわけ、同誌掲載の「鯉」と「たま虫をみる」の改稿過程では、登場人物の会話を叙述する方法や小説の語りが大きく変容していた。その結果、作中に焦点化されていくのは、言葉による所有の問題と言語コミュニケーションの挫折という、井伏の他作品に接続するテーマだった。ここでは、『三田文学』掲載の「鯉」と「たま虫をみる」が、井伏にとって衆目を集めた最初の作品であるというだけでなく、質的にも大きく変化し後続作につながることを示し、このとき改稿という行為が転機をもたらしていたことを論じた。作家井伏の表現的特質は、従来言われる「幽閉」から「山椒魚」に至る道程や、題材の共通性とは別に、複数の既発表作を同時並行的に改稿していくその行為のなから生まれており、それは作中の言語行為に見出せることがわかる。井伏にとって一九二八年の『三田文学』への小説掲載が、表現上の展開および文壇との関わりのある二つの観点で重要な転機となっていたことを明らかにした。

第三章 初期批評文と「炭鉱地帯病院」

——井伏鱒二のナンセンス——

この章では、井伏鱒二とナンセンスの関係性を、批評文と小説の読解を通して新たに捉え直した。井伏は新興芸術派の一人として注目を浴びるようになった一九三〇年前後に、「ナンセンス作家」と呼ばれたが、作家自身はこれを忌避し、また多くの井伏論者もこれを「不当」な「レッテル」と見なし井伏文学から排除してきた。近年では、井伏が後年になって当時の評価を修正しようとしていたことや、ナンセンス作家時代の作品にプロレタリア文学への批判的眼差しがあることが指摘されるなど、読み直しが進んでいる。しかしながら、肝心の「ナンセンス」自体については、やはり「レッテル」とみなされ、その内実は不問のままである。こうした現状を踏まえ本章では、ナンセンスという言葉が捉えた意味の射程を、同時代言説と井伏の創作活動のそれぞれに即して検証した。ここでとくに重視するのが、井伏Ⅱナンセンス作家という評価が生じる以前に井伏自身が記した複数の批評文である。これらを読み解いていくと、彼がナンセンスを小説の技法として積極的に評価していたことが確かめられた。本章では、井伏が論じたナンセンス概念の特徴を明らかにし、同時代の創作活動とどのような結びつきがあったのかを論じた。彼にとってナンセンスは、最初は佐藤春夫作品のなかに見出した批評概念としてあり、言葉の伝達回路に意味外しを仕掛ける叙述を意味するだけでなく、「現実」をどう描き言葉にするかという課題を克服するための方策だったことが明らかになった。

第四章 「槌ツア」と「九郎治ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること——聴き取られた音、書き取られた音——

この章では、井伏特有の言語観が表れた小説として名高い「槌ツア」と「九郎治ツアン」は喧嘩して私は用語について煩悶すること」(『若草』一九三七年二月)を、音と表記の観点から読み解き、テクストの持つ同時代的な意義を提示した。先行研究では、「私」の「郷里」に古くからある呼称習慣が登場する本作は、この呼称習慣自体が半ば実体化され、著者の言語体験を素材に農村共同体の閉鎖性を批判的且つ自嘲的に描いた小説と位置づけられてきた。本論ではまず、作中で呼称習慣と呼ばれるものが、音の差異を聴き分ける語りによって初めて形象化され、「習慣」として秩序づけられていく点を指摘し、物語に構築・構造化された装置であることを明らかにした。その上で、井伏がこのように音の差異を盛んに創出し、活字上に書き分けていったことの意義を、発表当時の時代状況のなかにおいて考察した。注目したのは、山本有三が提唱し出版メディア上で話題となったルビ廃止議論である。山本がルビ廃止を訴えた文章は、戦時体制を整えつつあった当局の思惑と幾重にも絡み合っただきな波及効果を生み、実際の政策に結実した。ここでは、山本の文章に多用される修辭とその言葉のコンテクストが時局と接続していく過程を読み解きながら、そこには、同質性を徹底させようとする単一的言語観が俄に醸成され幅広く共有されていったことを指摘した。その上で、井伏のこの小説が当時のこうした言語観を鋭く問い返すテクストであったことを論じた。

第五章 「花の町」(一)

——徴用作家の任務と「普及セシムベキ日本語」——

第五章と第六章では、井伏が徴用中に書き、新聞連載された小説「花の町」(『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』一九四二年八月一七日—一〇月七日)を取り上げた。この小説は、井伏が徴用先のシンガポールで従事した日本語普及活動に材を取って描いた宣撫小説で、戦時下の井伏の態度を示す重要な著作と見なされている。ただし、そこに描かれる日本語普及活動が高評価を得てきた一方で、当時の実態と小説表現との差異が言及されることは少なく、表現としての強度は問われてこなかった。そこでまずこの章では、当時の軍政資料や現地使用の日本語教科書等を参照し、占領下シンガポールにおける日本語普及活動の実際状況と特質を探った。その結果、占領最初期にあつては、派遣された宣伝班員たちが自らの手で指針をつくり運営しなければならぬ実態が明らかになった。それは裏を返せば、宣伝班員に大きな裁量が与えられていたということでもある。実際に、このとき指針を策定することに携わった中島健蔵、学校を運営することになった神保光太郎の言説を辿っていくと、彼らは「日本語」を、大東亜共栄圏という「新秩序」の象徴として捉えており、普及活動やその苦勞を語る言葉には、半ば無意識的に、言語的収奪と叙情的な単一言語観が織り込まれていた。一方、「花の町」には、日本語普及活動を中心とする「新秩序」の形成が頓挫する様子が重層的に描き込まれていたことが読み取れる。当時の普及活動の実態、および井伏の同僚である中島・神保の言説をそれぞれ参照してみると、井伏は「花の町」で宣撫小説のコードに沿いつつも、それを内破する描写を周到に選び取っていたことが明らかになった。

第六章 「花の町」(二)

——宣撫小説から反戦小説への反転——

続く第六章では、テクストの受容という観点からこの小説を読解した。この小説は、日本占領下の昭南市を舞台に、現地住民と日本軍関係者によるちぐはぐな日本語のやりとりを繰返し描いているが、発表当時の戦時下においても、それから時を隔てた戦後においても——つまり評者が扱って立つ価値観や思想が大きく異なる状況においても——つまり評者が扱って立つ価値観や思想が大きく異なる状況においてもなお、作品自体は高く評価され続けた。ここには、本作の受容をめぐるねじれを見出すことができる。本章ではまず、このねじれが、本作の評言である「日常」と相関していることを見出した上で、この小説が連載されていた期間中の『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』の各紙面を通読し、初出掲載メディアが小説受容に及ぼした影響を精査した。そして、本作が隣接記事と補完し合うかたちで、「新たに建設された」「明るく」「平和」な昭南市という当時の南方表象を積極的に産出していたことを明らかにした。さらに、戦闘を描かずに建設という「日常」を描く点が、大東亜文学に相応しく、新しい戦争文学の登場と見なされた一方で、戦後はそれが同じく評価されていたこともわかった。対して、小説本文の「日常」は、これとは全く別の内容を表象していた。それは、言語の規範が揺れ、変質し、更新され続ける動態であり、常に変容する契機を含み込む分裂的な「日本語」のありようだった。これを踏まえて、テクストの「日常」は、戦中戦後のそれぞれの評価を鋭く問い返す性質を持つていたことを論じた。以上、第五章と第六章の考察を通して、発表以来おしなべて高評価を得てきた理由とその背景には、小説が読

まれる場と作中の「日本語」表象が大きく関わっていたことを示し、その上で「花の町」の新たな意義を提示した。

第七章 「レンゲ草の実」

——戦後の表記改革と「現代かなづかい」——

この章では、同じく日本語の政策制度を作中に描いている、戦後の小説「レンゲ草の実」(『サンデー毎日』一九四七年一〇月二六日)を取り上げた。そして、敗戦直後の日本で行なわれた表記制度改革が同時代の文学へ与えた影響と、これに対する井伏自身の態度を考察した。この小説は、当時施行されたばかりの「かなづかい制度」とそれがきっかけで起きた村の騒動を描いている。本作に登場する「かなづかい制度」は、当時「戦後初の表記改革」と謳われて様々な反響を呼んだ「現代かなづかい」(一九四六年一月公布)を指すが、井伏は、現行制度の矛盾点を細密に写し取りつつ辛辣な批評を織り込んで描いていた。とくに、末尾部分には、文字表記の物質性を読者に強く意識させる記述がなされていた。しかし、この小説の雑誌掲載時には、作者の意図とは裏腹の活字表記で印刷され、末尾部分の叙述が機能しなくなった。ここには、掲載メディア側の付度が働いていたことが読み取れる。本論では、「レンゲ草の実」をめぐって生じた本文のディスコミュニケーションを踏まえた上で改めて小説を読み解き、仮名遣い制度の政治性を明視化させる叙法には、井伏自身の仮名遣い論議に対する強い抗いが認められるのと同時に、戦後初期の井伏作品とのつながりが読み取れることを指摘した。

第八章 「遙拝隊長」

——一九五〇年代における日本文学の「輸出」——

この章では、井伏の戦後代表作の一つである小説「遙拝隊長」(『展望』一九五〇年二月)を取り上げ、一九五〇年代以降本格化する日本文学の英訳出版事業において本作が担った役割を考察した。「遙拝隊長」は、敗戦前後の日本国内の状況を鋭く諷刺した物語として、現在に至るまで高い評価を得ている。しかしこの小説の英訳が、日本初の英文季刊誌『ジャパン・クォーターリー』の創刊号に掲載されたことはほとんど知られていない。同誌は、敗戦後の苦境を脱した「新しい日本」の「真の姿」を海外の読者へ伝えるべく、日本文学の紹介に力を入れており、エドワード・サイデンステッカー(Edward Seidensticker)、ドナルド・キーン(Donald Keene)、ジョン・ベスター(John Bester)、アイヴァン・モリス(Ivan Morris)といった、のちに日本文学の海外普及を担う有力な翻訳者たちが参加していた点に大きな特徴がある。そこでまず、同誌創刊までの経緯とその背景にある政府・ユネスコ共同の日本文学翻訳出版事業の動向を把握した。その上で、『ジャパン・クォーターリー』創刊号に掲載された、井伏鱒二の小説「遙拝隊長」(訳者グレン・ショー)ならびに谷崎潤一郎のエッセイ「陰翳礼讃」(訳者エドワード・サイデンステッカー)の英訳を、それぞれの翻訳者の関わり方と併せて比較検討した。今日ではほとんど顧みられることのない翻訳者グレン・ショーと、彼による「遙拝隊長」の英訳テキストは、圧倒的な知名度を獲得したサイデンステッカーならびに「陰翳礼讃」の英訳テキストとは様々な意味で対照的だった。この点を詳しく分析し、小説「遙拝隊長」を通して、戦後における日本文学の「輸出」が抱えていた矛盾を考

察した。

終章 井伏文学の生成と展開

この章では、各章の成果のなかでとくに確認したい内容や付加すべき視点についてのみ補足し、併せて、今後の課題と展望を示した。

まず、『父の罪』の分析と、以後の著作との連関を踏まえて、井伏の創作が翻訳に基礎付けられていることを指摘した。『父の罪』では、翻訳という行為を通して言語行為自体を前景化させる表現方法が用いられていたが、習作期以降の初期作品群において、改稿を経て浮上していくのも、言葉による所有や意思伝達の錯綜という言語行為であった。そして、本論で示したナンセンスの叙法は、こうした言語行為を前景化させる描写が新たに方法的展開を遂げたものとして位置づけた。井伏のナンセンスは、現実と言葉、言葉と意味をつなぐ場を絶えず問い返す運動であり、意味や価値のネットワークを切り崩して現実と言葉の関係性を問う点で、同時代のナンセンスにおける固有性も見出すことができた。これは、初期作品に描かれる翻訳のありようと機能的に強く結びついていた。そしてまた、このような言語の捉え方と描き方は、一方で、日本語という言語のありようを鋭く問う契機になる。第四章から七章までの各章で扱った作品は、日本語というシステム（およびその思想）の歴史性にそれぞれの角度から光を当てる機能を持っていた。また、第八章では、井伏の「遙拝隊長」とその英訳を取り上げ、翻訳不適格なテクストゆえに、日本文学の翻訳事業を問うための有意な小説であることを指摘した。なお最後に、以上の内容に基づき、個別の課題を記した。